おばあちゃんのひまわり

県立大島高等学校　二年　井上香奈

「あの子はどうしてしまったものかねえ。毎年あんなに楽しみにしていたのに。」

おばさんが困ったようにつぶやきました。

未来（みく）は東京に住んでいる、小学四年生の女の子です。毎年夏になると、母親の生まれ育ったこの南の島にやって来ます。未来はおばあちゃんがいるこの島が大好きで、毎年島に来ることを楽しみにしていました。

でも、今年は違います。大好きなおばあちゃんは、去年の秋、病気で亡くなってしまいました。未来はおばあちゃんが亡くなってから、暗い表情をすることが多くなりました。明るく元気だった未来のそんな顔を見て、お父さんもお母さんも心配していました。

そして今年の夏も、島へ行く日がやってきました。たくさんの荷物を持って、お父さんお母さんと未来の三人で島へ向かいます。

飛行機に乗っている時も、空港からバスに乗っている時も、やはり、未来に元気はありません。

「おばあちゃんが亡くなったことのショックが大きいんだろうね。みくちゃんは、おばあちゃんが大好きだったからねぇ。」

おばあちゃんの家に今も住んでいるおばさんも、未来の元気のない様子を心配しているようです。

この家には、もうおばさん夫婦しか住んでいません。おじいちゃんは、未来が生まれるよりずっと前に亡くなっているのです。

島に着いたこの日、未来は疲れていたのか、ご飯を食べておふろに入ると、すぐに眠ってしまいました。

次の日未来は、よくおばあちゃんと二人でおしゃべりをした縁側に行ってみました。

おばあちゃんは、未来の学校での話や、休日に家族で出かけた話をうれしそうに聞き、おばあちゃんが小さかったころの話やおじいちゃんのことなど、昔の話をたくさん聞かせてくれました。未来はそんなおばあちゃんの姿を思い出していました。

でも、もうそこには、あのお日様のようなあったかい笑顔も、小川のせせらぎのような優しい声もありません。おばあちゃんは、もう死んでしまったのです。

未来はおばあちゃんによく連れてきてもらった川へ行きました。おばあちゃんは、未来の泳ぎが上手だと何度もほめてくれました。

周りの木の間から日がさし、水面がキラキラと光ってきれいなのに、未来は泳ぎたいとは思いません。なぜなら、もうそこには、ほめてくれるおばあちゃんがいないからです。

未来は悲しくなって、家に帰りました。それから一週間、何もせずにただぼうっとして過ごしました。
お父さんとお母さんは、
「海へ行こう。」
とか、
「花火大会に行こう。」
と、未来を誘いましたが、未来の返事はいつも決まって、
「行かない。」
でした。
でも、そんなある日、未来が出かけたいと言い出したのです。その行く先は、おばあちゃんの大好きなヒマワリが咲く花畑でした。
一年前、おばあちゃんと最後に行ったのも、この花畑でした。その時は、大きなヒマワリの花がたくさん、日の光を浴びて輝いていて、おばあちゃんはとてもうれしそうに、その花たちを見ていました。
でも、今未来の前に広がっているのは、枯れてしまったヒマワリたちです。
「おばあちゃんのヒマワリが・・・。」
未来はどうしようもないくらい悲しい気持ちになって、とうとう泣き出してしまいました。
そしてその日の夜、泣き疲れて眠ってしまった未来の夢の中に大好きなおばあちゃんが現れました。
「おばあちゃん。」
未来は走り寄って、おばあちゃんの胸に飛び込みました。
「さみしかったよ。おばあちゃん。どこに行っても、もうおばあちゃんはいないんだもん。」
未来は泣きながら言いました。
するとおばあちゃんは、
「未来、おばあちゃんも会いたかったよ。でもね、未来。おばあちゃんはずっと悲しかったんだよ。だって、未来がいつも悲しい顔してるんだもの。」
と少し悲しそうに言いました。
「おばあちゃん見てたの。」
「ああ。いつも見てたよ。空の上からいつも。ねえ、未来。未来の名前はおばあちゃんがつけたって知ってたかい。未来には、未来(みらい)に向かってまっすぐ進んでほしい。そう思ってつけたんだ。まっすぐにお日様に向かって立っているヒマワリのようにね。」
「おばあちゃん。ごめんなさい。でも、おばあちゃんのこと思い出すと、悲しくなっちゃうの。」
「いいかい、未来。おばあちゃんはね。未来におばあちゃんとの思い出を悲しい思い出にしてほしくないんだ。こんな所で立ち止まってないで、前に進んでほしいんだよ。大丈夫。未来にはできる。おばあちゃんは、いつだって未来のこと見てるよ。」

そう言って、おばあちゃんは空にのぼって行きました。
「おばあちゃん。」
ここで、夢は終わってしまいました。
朝起きると、未来はお父さんにお願いをしました。
「お父さん。あの花畑に花を咲かせたいの。」
お父さんは最初びっくりしましたが、にっこり笑って、
「そうしよう。おばあちゃんも、きっと喜んでくれるぞ。」
と言ってくれました。そして、そんな二人を見ていたお母さん、おじさんおばさんも、未来の元気な姿を見て、みんなにっこり笑って、手伝うと言ってくれました。
みんな、一生懸命がんばりました。草を抜いて、土を耕し、種をまきました。未来は、おばあちゃんのことを思い出しながらがんばりました。もう、おばあちゃんのことを思い出しても、全然悲しくなんかありません。
種まきが終わるころには、もう夕方になろうとしていました。お父さんもお母さんも、おじさんもおばさんも、みんな子どもみたいに泥だらけでした。未来が
「みんな子どもみたい。」
と言うと、
「ほんとだ。」
とみんな笑いました。そして、未来は花畑を見て、
「おばあちゃん、ありがとう。私もヒマワリみたいになるから。ちゃんと見ててね。」
と言いました。
そして一年後。あの花畑には、大きなヒマワリの花がたくさん、太陽に向かってまっすぐに立っていました。